竹川義知記

日記で繋ぎ合わせた
早川孝太郎の年譜
昭和五年から昭和十二年の部分

○ 手元に残る早川孝太郎の年譜は、私が新城ふるさと講座（昭55・2・19）で発表した時の、研究資料である。あの時からもう二十八年も経過した。その間に、早川孝太郎に関する三冊の本が発刊されている。

平成十四年『屋根裏の博物館』　横浜市歴史博物館

平成十五年『早川孝太郎全集　第十二巻』　未来社

平成十九年『本山雑記（もとやまざっき）』　神奈川大学日本常民文化研編　日本評論社

○ この本の御陰で、年譜の空白の部分を詳しく知ることができた。

とくに『本山雑記』は、東栄町三ツ瀬のオヤカタ（御館・親方）の先代の、故原田清氏（現在の戸主　原田耕作氏の父）の書き残された日記であり、昭和二年から昭和二十年まで続けられている。

この中に、早川孝太郎をはじめとする、民俗研究家たちとの交流を克明に書かれている部分が昭和五年から昭和十二年である。これらを要約して年譜に書き入れることは、文中にある様々な情景や雰囲気を消してしまうおそれがあるので、原文をそのままコピーして年譜に並べさせてもらうことにした。お許しを願いたい。

○ 早川孝太郎を研究されておられる方々、また早川孝太郎ファンの方々、新たな資料を見つけたら教えてほしい。更に詳しい年譜が完成することを願いつつ。

平20・2・29　山本好美記

早川孝太郎年譜

明治二十二年

十二月二十日、南設楽郡長篠村大字横山三十一番戸（現新城市横川）で早川要作、志んの長男として生まれる。

明治二十九年

四月、長篠村長篠尋常小学校入学

明治三十三年

三月、長篠尋常小学校卒業（当時は四年制）。四月、同校高等科入学

明治三十五年

三月、同校高等科卒業。卒業後、家の農業を手伝う。

明治三十六年

姉婿の世話で大野銀行豊橋支店に住込み勤務。かたわら市立素習学校へ通ったもよう。

明治四十一年

画家を志し上京。弟照治（東京日本橋雑貨店勤務）と同居。白馬会洋画研究所（のち菱橋洋画研究所・主宰黒田清輝）に入り油絵の修業。洋画から日本画に転じた川端龍子の門に移り、さらに新興大和絵の松岡映丘（柳田国男の弟）に師事。

明治四十四年

四月、父要作死去、家督を継ぐ。

大正三年

弟照治奉公先の得意先、薬品問屋長井幸三郎長女てると知り合い結婚。

大正四年

三月、『郷土研究』第二巻十二号に「三州長篠より」が掲載される。以後、次々に寄稿し、柳田国男に認められる。長男登誕生。

大正八年

十二月、長女朝子誕生。

大正九年

二月、柳田国男と共著で『おとら狐の話』（玄文社・四十銭）刊行。この年田峰の地狂言を見、その後柳田の示唆によって、郷里横山周辺の地狂言の調査を始める。

大正十年

四月、南島談話会が発足、会員として例会に毎度出席。

十二月、『三州横山話』（郷土研究社・七十銭）刊行。

（昭和5年4月撮影）

民俗学者柳田国男に出会う

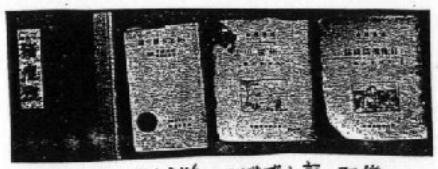
早川家を守り続けた照治氏

『新城の文化財案内』が発刊されてまもなく、初めて照治氏宅を訪問した。本を差し上げると大変喜んでくださった。その後、何回となく訪問をしているが、なんと博学な方であり、政治・経済・文化・歴史など、多面にわたり話題が豊富であって、魚釣の話、山菜の話に至るまで、とことんまで研究し、生活にすべてを生かしておられることに感心させられる。ことばの端々に、模倣ではだめだ。開拓をせにゃあ……とか、こんな立派な川を目の前にして生きていけぬはずはない。それは手段が悪いのだ。……などと人生哲学の一端をのぞかせる。

孝太郎が画家を志して上京し、照治氏の奉公先に同居したころのこと、絵の修業時代、柳田国男との接触により、各地へ民俗採集に出る時代は、貧窮のどん底であったようである。その陰で兄のために、物心両面の援助をしたのは、この照治氏であった。

血は争えない兄弟のこと、照治氏の姿からして、孝太郎の人間像が強く浮かびあがってくる。

郷土研究



播磨狸話　おとら狐の話　三州横山話　羽後飛島国記

大正十二年

十二月、柳田国男宅で談話会始まり、以後毎回出席。　折口信夫に出会う。

大正十三年

十一月、『能美郡民謡集』（郷土研究社）刊行。このころ花祭の下調査に北設楽を訪ねる。

大正十四年

十月、『羽後飛島因話』（郷土研究社・一円）刊行。

十一月、雑誌『民族』創刊。それに「鶏の話其の他」を発表、以後同誌に次々と寄稿。十二月、次男啓誕生。

大正十五年　昭和元年

一月、折口信夫と共に長野県新野の雪祭と愛知県三沢山内の花祭を採訪。以後例年花祭など信遠地方の芸能・民俗を採訪。帰京後、柳田の紹介で渋沢敬三に会う。

十一月、『猪・鹿・狸』（郷土研究社）刊行。十二月、母志ん東京の宅で死去。

昭和二年

アチックミューゼアム（渋沢敬三主宰）に入会。七月、民俗芸術の会創立、会員として以後月々の談話会に出席。　渋沢敬三に出会う。

八月、下津具村村長だった夏目一平を尋ねる。　夏目一平に出会う。

花祭の源流である大神楽の実見者を探すためであったが、ここで、はからずも彼らの蒐集活動を知ることになった。（早川孝太郎全集12 P500）

昭和三年

一月、『民俗芸術』創刊号に「地狂言雑記」を発表、以後連載する。同月、渋沢敬三を案内して三河の花祭（上黒川・古戸・本郷）を採訪。十月、この年一月創刊の『旅と伝説』第一巻十号に「月の大欅」を発表。十二号まで昔話・伝説の記録を掲載。

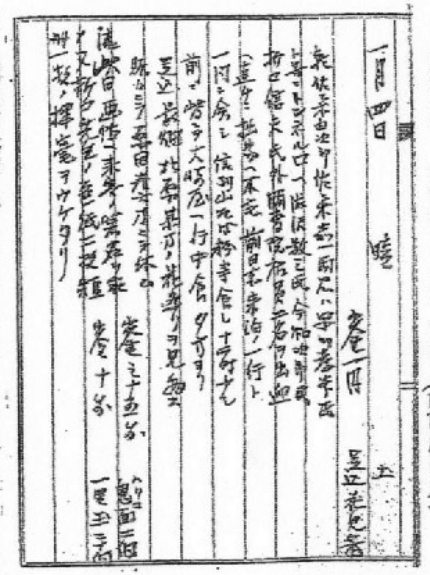
一月八日、原田清に出会う。豊根村下黒川の森屋旅館で、当時本郷小学校長であった窪田五郎が、原田を伴って会同、折から上黒川の花祭に来ていた早川に紹介した。（本山雑記 P499）　窪田五郎に出会う。　原田清（33歳）に出会う。　早川（38歳）

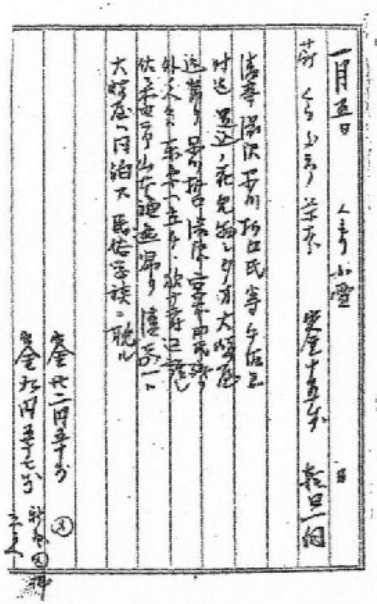
昭和四年

三河北設楽で収集の民具をアチックミューゼアムに収める。ミューゼアムは、このころを契機に民具の収集・研究に重点を置くようになる。

昭和五年

一月三日　斎藤友弥七、本山ヨリ本郷ヘ帰来ス。此日東京ヨリ民俗学者一行来宅。早川、宮本、渋沢、今、折口諸先生也。足込花祭ヲ見ル為ノ一行也。（日記原田清）





花宿足込長畑
北原家

一月四日　晴　土
出金一円　足込花見物
朝佐々木田次郎佐々木喜三両君ヘ早川孝太郎氏ト共ニトンネル口ヘ渋沢敬三氏、今和次郎氏折口信夫氏外、図書院店員二名ヲ出迎ヘ直チニ社宅ヘ来宅、前日来泊ノ一行ト一同ニ会シ信州出ベバ粉等食シ十二時ナシ前ニ皆ニテ大峠屋ヘ行中食　夕方ヨリ足込長畑北原某方ヘ花祭リヲ見物ス
駄カニテ原田彦六方ニテ休ム　出金二円五銭鬼面二個
清地目録帖ヘ来客ノ署名ヲ求ム又折口先生ノ色紙二枚短冊一枚ノ揮毫ヲウケタリ　出金十銭　墨二個

原田清氏の日記にはその模様が次のように覚え書きされている。

「中在家の花祭りを演ずる者はみんな出かけた。足込からも故神谷徳一氏外、応援をしてもらった。六泊位渋沢邸に泊って、東京の有名人が沢山来られた中でお祝いをした。その費用は渋沢さんが全部負担したわけだが準備諸掛、衣装道具の新調、東京市内視察等の諸費用、何やかやで、原田清が四、五百円ほど出した」と。（ふるさとの今昔　原田長美）

昭和5年

当時の原田清さんの日記抜萃

三月十一日　中在家花祭、東京芝三田綱町渋沢子邸ニテ執行ニツキ、一同二十三名ト共ニ此日上京。東助、三平同行。十八日帰来セリ。（本山雑記）

午后五時半、新橋着、早川孝太郎氏出迎有之、直ちに芝三田綱町渋沢子爵邸へ入泊。

十二日　花祭準備ニ着手、夜渋沢邸にて剣立ヲナス。

十三日　花祭本楽当日、準備出来、午后五時より施行、夜十時半終了

観客二百五十名余、大盛会にて大成功也。

十四日　花祭後片付け、神一行五名、宮本勢助氏方へゆき、原田清、早川孝太郎氏と同道、大森の折口先生を訪ネ、午后三時ヨリ渋沢邸ニテ活動写真撮影ヲ行ウ。

十五日　雨中ヲ一行東京見物ス。夜十一時ノ夜行ニテ一行帰途ニツク。

四月十一日

[花祭東京へ進出]

四月、十五日『花祭』前・後二巻（岡書院・二十五円）刊行。その刊行と渋沢邸改築の宴祝ぎを兼ねて、芝区三田綱町十番地渋沢邸で三河北設楽郡本郷町中在家の花祭を披露。（東京での初めての公演。約二十五名上京。）

昭和5年

澁澤敬三を囲み花祭一行の記念写真。早川孝太郎、藤木喜久麿は一行を迎えた側で、当時のアチックミューゼアム所員。神谷德一、和合俊一、藤谷源太郎は足込の人、ほかは三ツ瀬と中在家の人々である。『柏渠拾遺』より。

早川の『花祭』出版記念と、東京・三田綱町の澁澤邸の改築竣工を機に同邸で行なわれた花祭の「四つ舞」。昭和15年(1940)4月13日。

早川孝太郎多年苦心の大著『花祭』出版記念のため、たまたま綱町邸改造竣工を機に三河本郷三ツ瀬の花祭一行を綱町邸に招き一力花を御請執行。柳田國男、泉鏡花、石井健吉、石黒忠篤、武井武雄、新村出、市河三喜、前田青邨、小林古径、穂積重遠、白鳥庫吉、幸田成友、三村清太郎、飯塚友一郎、石本己四雄、宇野圓空、橋本傳左衛門、田村剛、宮尾しげを、松平斉光、那須皓、竹友藻風、石田幹之助、松本信廣、伊波普猷、櫛畑雪湖、野上豊一郎、小野武夫、東畑精一、土屋喬雄、金田一京助、有賀喜左衛門、宮本瑛、宮本勢助、木村修三、明石照男、佐々木修三郎、尾上登太郎、小池厚之助、木内信胤、林正道、菊池健三、井上薫、尾高鮮之助外数十名来会。すべて花祭の抜粋篇で、三ツ舞、四ツ舞、剣の舞の外湯囃子まで少しずつ舞う。来会者には供覧し得ざりし祭前後の滝祭等の祭事も行なってもらい少しずつ十六ミリに収めた。(『柏渠拾遺』の解説)

外数十名の中には関屋宮内次官もいたようで、次官の執奏によって『花祭』は天覧に供されることになった。限定三〇〇部のうち第一〇一冊を奉献することにして、早川は四月一九日に宮内庁へ手続きをした。

P357 (早川孝太郎全集第12巻)